

2. 白神自然学校一ツ森校の取組

——白神山地を活用した環境教育と地元雇用につなげる——



白神自然学校一ツ森校がある木造校舎（青森県鯨ヶ沢町）



話し手：NPO 法人白神自然学校
一ツ森校代表理事 永井雄人 氏

【プログラムの概要】

- 名 称 夏休みこども田舎暮らし自然体験塾
平成 18 年度子どもゆめ基金助成事業
- 主 催 NPO 法人白神自然学校一ツ森校
- 日 程 平成 18 年 7 月 27 日(木)～8 月 3 日(木)
7 泊 8 日
- 場 所 青森県西津軽郡鯨ヶ沢町一ツ森町
- 施 設 白神自然学校一ツ森校
- 対 象 小学校～中学生、20 名
- 参加費 25,000 円（宿泊費、交通費、食事、保険料）
- ねらい 白神山地の自然を活用して子どもたちの環境教育に役立たせるとともに、地元住民の雇用につなげる拠点としたい。
- （プログラム事例：203 頁参照）

——白神自然学校は、どのような経緯から設立されたのですか。

永井 今でこそ白神山地は世界遺産として有名になっていますが、以前は地元の人たちでもよく知らない無名の山地でした。そうした中で、青秋林道問題^(注)が持ち上がり、後の自然保護、環境問題として知られるようになりました。そうしたことが基盤となって、平成5年12月、白神山地は屋久島とともに世界遺産に登録されました。



津軽峠からみた世界遺産の白神山地（青森県鯨ヶ沢町）

その年に、「白神山地を守る会」、「白神植樹交流会」という会が発足し、それ以来、この会にかかわっています。いろんな人が尋ねてきて、「白神の自然保護とは一体何か」ということがよく議論になりますが、結論としては「白神の自然保護運動は、破壊されたところを植林し、復元・再生していく活動」ということになります。

具体的な活動として、ブナの実を拾い集め、苗床で苗を育て、山に戻すという取り組みを始めました。ところが、この活動に集まってくるのは、地元の人ではなく青森県以外の人がとても多かったのです。白神山地で長い間林業にかかわってきた人や青秋林道問題にかかわってきた人たちではなく、他から来た人たちが中心となって活動をやるようになったのです。これでは、長い目で見たとき、本当に白神の山を守ることになるのか、という危惧を感じていました。

(注) 秋田県八森町と青森県西目屋村を結ぶ全長 28.1km の林道として計画されたが、鯨ヶ沢町の赤石川源流を通るルートに変更したことなどから住民反対運動が起こり、着工から 8 年目で工事が中止された。これが、マスコミにとりあげられ、国民的な自然保護、環境問題の関心事に発展した。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

そうした中で、赤石川流域にある町立一ツ森小学校が廃校になるという話が出てきました。そこで、その廃校校舎を活用して、地元の人たちが山とかかわる活動ができないものかと考えたのです。そうした考えを地元の人たちに話したら、「林業とか、山菜料理とか、山の暮らしとか、これまで山と深くかかわってきたことだったら自分たちにもできる」ということになったのです。そこで、「山の暮らしに根ざしたメニューを生かした自然学校を発足してみよう」という話に発展していきました。

平成15年3月、一ツ森小学校が閉校になりましたので、町の協力を得て、その年の10月に「一ツ森自然学校」を発足しました。そういう経緯がありますから、自然学校の講師陣は基本的に地元の人たちが支えとなっています。

——廃校校舎を活用して、手作りで自然学校を運営する仕組みは、大変ユニークですね。この自然学校では、どのようなメニューとして取り入れていますか。

永井 基本的には、地元の人たちが持っている山・川の知恵というものを、うまく自然学校のメニューに取り入れるようにしています。例えば、白神山地が世界遺産となった歴史とか、この地域の伝統的な文化、赤石マタギの話など白神山地のブナ林と密接にかかわった山村の歴史をわかりやすく紹介しています。この地域は、白神山地の核心部分を源流とする赤石川が日本海と繋がり、それが一つの水系を形づくり、そこに住む人々のさまざまな暮らしがあります。こうした自然や暮らしを、青森県内だけではなく都会の人にも知ってもらおうということで、インターネットを活用して自然情報を全国に配信しています。

——昨年は、全国的にブナの実がたくさん実りました。白神ではブナをどのように育てるのですか。

永井 ブナの実は4年から5年ごとに豊作となりますので、その年にブナの実を採集し、秋に種を蒔いて、翌春に芽をだしたものを育て、秋に根の先端を4分の1ほど切り落とします。そうすることによって、上に伸びる力が強くなります。こうした作業を4、5年繰り返して幹周りが丈夫な苗を山へ戻すのです。

このやり方は、青森県林業試験場が、もう十何年もかけて試行錯誤の末、編み出した方法です。最初の頃は、山に植えつけた苗がほとんど根付かないということがありました。また、せつかく伸びた稚樹の先端が鋭い刃物で切ったようになっていることもありました。これは後で分かったことですが、残雪の上に出たブナの新芽をウサギが食べていたのです。ブナの天敵はウサギだったのです。そこで、現在ではウサギに新芽を食べられないようにネットをかぶせることをやっています。ブナの稚樹が大体1.5m以上に成長すれば、ほぼ7、8割は食べられないようです。



ブナの実を拾い集め、苗床で苗を育てたブナの実生苗。秋に根の先端を切り落とす作業を4、5年繰り返して丈夫なブナの苗木に育てる。
(青森県鯉ヶ沢町)

——ブナは、なかなか人手では育ちにくい木らしいですね。そういう意味で、白神自然学校で行われている事業は、大変興味深いですね。ここでは、ブナの苗木を販売しているということを知りましたが——。

永井 全国には、ブナを育ててみたいという方がいますので、そういう方にはブナ苗を販売しています。自分の家の庭に植えている人もいますが、ある程度まで育てそれを白神に植える方も少なくないですね。

先日は、新潟のある土木会社から300本ほど注文を受けました。白神自然学校のホームページをみて、ブナの苗木が販売されていることを知り、雪で全滅したブナの森を復元したいとのことでした。

——ブナの植林活動を通じて、全国に輪が広がっているのですね。ところで、ブナの植林活動のほかに、なにか林業体験活動をやっていますか。

永井 白神自然学校の近くに、国有林の「白神自然学校遊々の森」を11haほど借りています。ここでは、主に杉の間伐をやっています。現在の日常生活の中では、なかなか木を切るという機会はありませんので、親子で木を切る、子ども同士で切るという体験活動をやっています。

そうした体験を通じて、森の仕組み、林業を肌で理解してもらいたいと思っています。切り倒した杉の木の皮を剥ぎ、丸太に切って運び出し、加工して木工品を作っています。その他、近くの雑木林を使って、炭焼き体験をやっています。炭焼き小屋は、以前にマタギが造ったものを活用し、炭焼窯は赤土を使った昔ながらの本格的な炭窯を使っています。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

炭焼き体験は、地元の資源を使った自給自足の生活を体験してもらうことがねらいです。そうした山村の暮らしを、いまの子どもたちに伝えることができればと思っています。将来は、こうした施設を整備していきたいと思っています。



切り倒した杉の木の皮を剥ぎ、丸太に切って運び出し、木工品の材料とする。(青森県鯨ヶ沢町)

——子どもたちが学校で教えられていることは、「木は切ってはいけない」という固定観念があるようです。体験学習などで間伐をするとき、「エー、木を切ってもいいのですか」と怪訝な顔をする子どもが少なくありませんが。

永井 この地方では春先にリンゴのスグリ（摘果）をしますが、山の間伐も同じことです。小さな実を摘むことで大きいリンゴを作る、間伐をすることで立派な木を育てる、そのためには実を摘んだり、木を切ったりすることが必要だということを子どものうちにキチンと教えることが大切だと思いますね。

——ところで白神自然学校では、どのような組織体制でやられていますか。

永井 白神自然学校では、毎年度理事会を開いてその年度の方針を決めるほか、地元の人たちとの交流会を通じて直接意見をもらうようにしています。職員は、基本的に地元の人を採用しています。特に、地元の婦人会が大きな力となっています。当初は、2つの集落に限っていましたが、現在は4つの集落に広がっています。それぞれの人たちが持っている得意な能力を生かしてもらっています。その他、活動リーダーが不足する場合は、国際ワークキャンプ（NICE）にボランティア派遣を要請しています。

——白神自然学校では、どのような広報活動をされていますか。

永井 この地域では、インターネットを使う環境がまだ整っていません。このため、今でもISDNしか使えない状態です。今は、自由に使えるようになりましたけれども、初めは職員のインターネット研修から始めなければならない状態で、大変苦労しました。おかげさまで、昨年2月、環境活動パートナーシップ推進事業で最優秀賞、あおり農村整備広報大賞で優秀賞をいただくところまでできました。

そのほか、今年から県教育委員会とタイアップして、地元の子どもたちに世界に誇る白神の世界遺産を知ってもらおうという活動を始めました。また、小学校5年生を対象とした社会の教科書の中で、白神山地というコーナーを担当しまして、白神山地にある山、川、海の繋がりを説明し、いま自然保護のために植林運動が始まっていることを書きました。こうしたことを、まず県内の子どもたちに知ってもらうことを働き掛けています。

——地元の子どもたちの参加は、どのようになっていますか。

永井 地元の子どもたちからすると、普段から見慣れた山や田園風景ですから、その価値はなかなか理解されないものです。これは、大人でも同じことが言えます。そういう中で、昨年からは地元の赤石小学校、南金沢小学校、中村小学校の児童が参加しました。今年、鱒ヶ沢高校の生徒が始めてブナの植樹活動に参加してくれました。

来年からは、西津軽郡の小学校の児童が参加することになっていますし、さらに県の教育委員会との間で弘前市、青森市内の学校が参加する話が進んでいます。



修学旅行に訪れた子どもたちを案内するスタッフ（青森県西目屋村）

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

——自然を体験していない親の世代がだんだん増えてきて、自然を教えることができない。また、核家族化して教える世代が身近になくなっています。

永井 今では、子どもの虐待をはじめとして、社会の仕組み自体が子どもたちを育てる環境にないですね。例えば、川に行っても川遊びができない。親がまず遊んだことがありますからね、林業体験などもそういうことが言えます。

一番感じるのは、教師にそうした経験が少なくなっていることです。総合学習のプログラムをつくるにしても経験がありませんから、地域の人たちに丸投げしてしまう。その一方で、「あれしちゃいけない」、「これしちゃいけない」、「何しちゃいけない」と言ってきます。そういうことから、教師と子どもたちの関係を一旦断ち切ったうえで、そこから始めないと何もできないのです。

最近の教師は、頭脳的には優秀な人が多いのですが、自然体験が乏しく、山や川に立ち入ること自体に恐れを感じ、自然は大変危険だと認識しています。また、事故が起きた場合の責任問題とか、それらのことを考えるとなかなか踏み込めないのが実情のようです。



ライフジャケットを付けて川遊びに興じる子どもたち（青森県鯉ヶ沢町）

——長期自然体験に参加した子どもたちの意識の変化について、何か感じていますか。

永井 我々が小さい頃は、齢の上の子が大将になって、下の子の面倒を見ていました。遊ぶにしても、喧嘩をするにしてもルールがあって、上下関係がキチンと出来ていました。しかし、今の子どもたちは、自然学校に来たときは、上の子に対して「何々君」などと呼んでいます。それが、だんだんと日を重ねるようになって、年上の子が一目置かれるようになり、いつの間にか上下関係ができ上がっています。2、3日も経てば、年上の子に年下の子がぞろぞろくっついて歩いているシーンをよく見かけます。

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

つまり、最初は友だち関係であったものが、上下関係というか、仲間のなかでの立場、役割というものを互いに認識するのでしょうか。全く知らない子どもたちが一緒になってコミュニティー社会をつくり上げていくのだと思います。たとえ短い日数であっても、子どもたちが自然に順応し、そういう能力を発揮することは素晴らしいことだと思いますね。

——学校の子どもたちが、自然学校を訪れるのは総合学習としての位置づけですか。

永井 それは、いろいろあります。東京都杉並区の場合は、教育委員会とタイアップして、夏休みを利用した総合学習の一環としての宿泊研修という位置づけです。その他、修学旅行として受け入れるという自然体験学習というものがあります。修学旅行ですと、首都圏では東京、神奈川、埼玉、千葉です。それ以外では、札幌、山形からの子どもたちを受け入れてきました。



夏休み子ども自然体験塾に参加した東京都杉並区の子どもたち

——そういう意味で、「白神」というのはすごく知名度があるということですね。

永井 世界遺産という知名度はすごいと思います。当初は、修学旅行で大勢の子どもたちが一度にきたらどうするか。大勢の子どもたちがこの地に来たら、また自然破壊になるのではないかという心配の声が上がったほどです。そこで、我々は幾つかの小グループをつくり分散して活動することを考えています。例えば、林業体験プログラム、山菜料理プログラムなど、細かなプログラムを作るなどです。

——修学旅行の場合は、宿泊はどうされるのですか。

永井 今のところ修学旅行の場合は、旅館やホテルを利用しています。しかし、先々はこの地域の農家に民宿にして、農業体験や農村の暮らしを体験する修学旅行を受け入れるグリーンツーリズムの方向を考えています。現在、農漁業体験民宿という制度を活用する

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

ことで、町と相談し、農家の人たちに集まってもらってようやく9軒できました。農漁業体験民宿というのは、1軒で大体4、5人が限界ですから、まだまだ数が足りません。

——他県の子どもたちを受け入れることで、地域の人たちの意識が変わったことがありますか。

永井 初めの頃、自然学校で夕食を出したとき、地元で客人をもてなす昔ながらの白神御膳というものを出したことがあります。たくさん料理を盛り付ければ喜ぶだろうという感覚です。ところが、子どもはビックリして多くを食べ残してしまいました。そこで、たくさん出せばいいという感覚では駄目だということが分かったのです。それよりも、おいしいものをほんの少し出せば、また食べたいという気持ちが起きてくることに気付いたのです。

ただ、自分の家に人を泊めるという気恥ずかしさ、そういう感覚からまだ脱皮していません。その意識を少しずつ変えて、本来の農家民宿のスタイルにしたいと思っています。

自然体験の一つの目的は、自給自足の生活、自然との共生、集落の人たちの生きざまを体験してもらうことです。お客さま扱いではなくて、ありのままを体験してもらいたい、自然というのはこういうものだ、こういう食べ物、暮らしがあるのだということを感じて欲しいのです。その体験は、その子どもの成長にとって素晴らしいものになると思いますから。



地元の婦人会の人たちの手による山菜料理。交代で食事を作っている。(白神自然学校一ツ森校)

——白神自然学校では、地元のご婦人たちが積極的に活動していますが、こうした活動の源泉はどこにあると思いますか。

永井 白神山地を世界遺産にするそもそものきっかけは、昭和20年の3月20日未明に起きた鉄砲水による86名の村人が亡くなったことから始まっています。ですから、赤石

川の上流部に林道ができて、ブナ林が切られてしまうと、またおびえた生活をしなければならない、そういう危機意識が根底にあって反対運動に結びついたのです。その反対運動の異議意見書を青森県知事が受け入れて、森林生態系保護地域に指定し、もっと法的な規制の網を掛けようということで世界遺産に登録されたのです。

一ツ森校に来ている人たちは、そのときの当事者の人たちです。ただ、それまで自由に山には行って山菜などをとっていたのに、世界遺産に登録されたら法的な網がかけられて自由に山にはいることができなくなったという思いがあります。

こうしたことなどから、この地域の林業が急速に衰退してしまった。そういう意味で、もう一度別な方法で白神の山にかかわっていきたいという意識が強いのです。そのために、地域でブナ苗木を育て、それを山に戻す運動を積極的にやっています。さらに、伝統的な文化を都会の人にも知ってもらいたい、そしてもう一度息を吹き返したいという願望をもっているからだと思いますね。



赤石川の源流部にある白神山系（青森県鯨ヶ沢青岩展望台）

——都会の子どもたちが訪れることが、地元の励みに繋がっているのでしょうか。

永井 昔からあった小学校はなくなったけれども、全国から子どもがやって来る、そして自分たちが精魂入れて作った料理を「おいしい」と食べてくれる。澄んだ空気、清冽な水が育てた新鮮な野菜を喜んで食べてくれる。これは、この地域の農家の人たちにとって大変うれしいことです。それは生きがいにもなっていますし、もちろん収入にもなっています。また、酒かすを使った「白神まん」というオリジナル菓子を作りあげました。これらは、地元の人たちにとって励みとなっています。

この地域では、かつては都会に出稼ぎに行ってお金をたくさん稼いでくる人が一番偉いという考え方がありました。今では、幾つになっても自分を必要としてくれる、孫に小遣

第4章 森林を活用した長期体験活動の取組事例

いをあげることができる、孫が「おばあちゃんは、すごい」と言ってくれる、そういう声があちこちから聞こえてきます。家の中で大事にされるのが、大変な喜びになっているみたいですね。

——そういうことになるまでには、どれほどの年数がかかったのですか。

永井 平成10年に、一軒家を一ツ森地区に借りまして「白神山地を守る会鱒ヶ沢事務所」を置き、そこを前線基地として8年間活動してきました。当時、オウム真理教の事件があったときでしたから、オウム信者が逃げてきた、とうわさされたこともあります。そういう中で、町が廃校校舎を提供してくれたことは、とても助かりました。これがなければ、いまの自然学校は無かったと思います。校舎は町から無償で提供を受けていますが、屋根のペンキ塗りなどの維持は自然学校が自前でやっています。

ある時、鱒ヶ沢町長に呼ばれまして、今まで漁業中心の町としてやってきたが、これからは町長の公約として白神とかかわった町づくりをしたい。ついては、町の職員を対象に研修を開くので、「白神山地を生かして何ができるか、あなたが考えていることを述べて欲しい」と言われたのです。町がやろうとする町づくりの方針と私がやろうとしていた方向が一致したのです。そうした経緯があって、廃校校舎を無償で提供してもらい、地元と一緒に活動することができたと思っています。とにかく、町の施策とピッタリと合ったところが、とても大きいと思っていますね。

——7泊8日の「こども白神山地自然体験塾（夏編）」の参加料は、2万5千円に設定されていますが、これですべての運営ができるのですか。

永井 この事業は、子どもゆめ基金^(注1)の助成金を受けて実施しています。誰でも参加しやすいように、あえて参加費用を低く設定しています。

首都圏から参加する子どもたちは、新幹線と飛行機を利用することになります。最寄の駅や空港までは送迎していますが、基本的には自前となりますから、交通費まで含めてできるだけ親の負担にならないように考えています。それにしても交通費はかなりの負担になりますね。

こうした一連の取り組みが高く評価されて、平成16年度に「オーライ！ニッポン大賞」^(注2)を受賞しました。今後とも、インターネットを活用して、白神自然学校の情報を発信し続け、この地域の活性化につなげていきたいと思っています。

^(注1)子どもの健全な育成の推進を図ることを目的に、民間団体が実施する特色ある取組や体験活動等の裾野を広げる活動について支援。実施は、(独)国立青少年教育機構。

^(注2)都市と農山漁村の共生・対流の優れた取組を表彰し、国民への新たなライフスタイルの普及定着を図ることを目的として、オーライ！ニッポン会議などが主催。